

万次郎人生の概観⑬

「開成学校教授就任」と「欧州視察」

(1)「開成学校(現在の東京大学)」二等教授に就任

明治元年(1867)10月、万次郎は山内豊信の知遇を得て、100石の知行を受けて、馬廻り格式で召抱えられた。また、明治政府は各藩の幕末に活躍した有為な人材を江戸に「徴士」として召集し、政府内の役職に就けた。万次郎も徴士に選出され、開成学校(現在の東京大学)二等教授に任命された。二等教授5人のうちの1人であった。一等教授は無く、二等教授が教職職階の最高位であった。職階は頭取・二等教授・三等教授・教授試補から構成され、頭取は学校長であろう。ここで万次郎の弟子・立花鼎之進も教授試補に任命されている。明治2年(1868)から教職職階が改定され、大博士・中博士・小博士・助教・大得業生・中得業生・小得業生となった。ちなみに万次郎は中博士であった。

(2)政府より欧州視察(普仏戦争の)を命じられる!

明治3年(1870)7月19日、欧州で普仏戦争が勃発する。プロイセン王国とフランス帝国の間で行われ、戦争は翌年5月10日まで続いた。この戦争はスペイン王位継承問題に関わり、プロイセン王国の挑発に乗ったフランス帝国側が起こした。プロイセン王国は北ドイツ連邦、南ドイツのバーデン大公国・ヴュルテンベルク王国・バイエルン王国等とも同盟を結び、フランス帝国に圧勝した。

万次郎は、政府から日本政府代表の一員としてこの普仏戦争の視察に行くよう指名された。そこで開成学校を辞し、これに加わることになった。

以下に視察メンバーとなった人物の氏名と旧所属藩命を()に記す。

- ①大山弥助(巖)(薩摩) ②品川弥次郎(長州) ③池田弥一(肥前)
④中濱万次郎(土佐) ⑤林有造(板垣退助の代理)(土佐)
⑥松村文亮(肥前) ⑦有地品之允(長州)

※①～⑤は明治政府が任命し、⑥⑦は各藩から推薦された任命である。

(3) 欧州視察の旅程・・・

- (1) 明治 3 年 (1870) 8/28 横浜から米国蒸気船「グレート・リパブリック号」にてサンフランシスコへ 林有造と船同室
- (2) 9/13 サンフランシスコ着、9/16 陸路でシカゴへ
- (3) 10/20 シカゴへ着、ナイアガラの滝を見物
- (4) 10/28 ニューヨークへ着、英国行きの船が 11/2 に出港
船便待ちの数日間にホイットフィールド船長と再会。
- (5) 11/2 英国船「ミネソタ号」でニューヨークを出港
- (6) 11/15 英国リバプール上陸
- (7) 11/16 汽車にてロンドンに着

このロンドンで万次郎の身体に病気が襲いかかる。旅先での病気にさぞかし戸惑いや不安を感じたことだろう。足に潰瘍ができ、痛みもあることからロンドンの病院で診察を受けた。医師はすぐに治るものではなく、これから寒くなる時季でもあり、旅を続けることは無理だろうという診断を下した。この先、視察団一行の旅程に支障をきたしてはならないと、やむなく一人で帰国することを決意した。12月13日早朝、大山弥助等はロンドンで万次郎と別れ、ドーバー海峡を渡りベルギーをめざした。万次郎は、帰りは米国に戻る西廻りではなく、スエズ運河・インド洋を通る東廻りで帰国した。ちょうど明治 2 年 (1869) にスエズ運河が開通したばかりで万次郎が魅力的に感じたのだろう。明治 4 年 (1871) 2 月 28 日神戸港に着岸。同月 3 月 2 日に横浜港に着岸し、帰宅した。

欧州視察の途中、ホイットフィールド船長との再会については、次号で詳しく紹介したい。

【編集後記】

今年は「線状降水帯」や「台風」等に振り回されて目まぐるしく、異常気象を感じる夏でした。朝雨・昼晴れ・夜大雨等、1 日の内でも天候が千変万化します。まさに気象庁・天気予報泣かせの気象状況といえるでしょう。今週になり、少し秋めいてきましたが、それまでは本当に蒸し暑く、酷暑が続いていました。日本の四季が年を追うごとに崩れてきているように思えてなりません。

さて、『市史』に掲載する引用図面、引用画像等の許可申請が多くて困っています。ある章ではその大部分が引用図面や画像であり、編さん室も 10 個ほど新たにトレースして図面を作りました。仕方ない場合もありますが、引用図面や画像が多いと「人のフンドシで相撲を取る」的な印象を与えますし、できるだけ少ない方がよいと思います。必要最小限度に留めてください。(田村)